

彩りの中の息吹に気づいて

(原文)

植木 涼太 (9 歳)

埼玉県

蓮田市立黒浜南小学校

「自然と言ったら何色だと思う？」こう聞かれて多くの人は「緑、青、透明」と答えるだろう。ぼくも、自然という言葉を使いながら、じっくりとその色や存在を考えたことはなかった。そんな中、6月の庭先に青、白、桃と様々な色を咲かせるあじさいに目が止まった。家の庭には毎年あじさいが咲きみだれる。母に聞くとどれも大切に育ててきた思い出があるそうだ。「これはパパが初めてくれたやつ、こっちは、子供たちがくれたやつよ。」と、うれしそうに話す。それにこたえるように、あじさいもうす暗い庭のすみから、この淡い紫がかかった優しい水色も、桜のようなうすい桃色も、自然の色なんだよと花全体で必死に語りかけているようだった。この自然が作りだすなんとも言えない色は、ぼくや、母を魅了して本当に美しかった。自然の色はなんておくが深いのだろう。目の前には母と自然が共に作りあげた幸せの色が広がっていた。この時、人が自然によりいえば、自然もこたえてくれるのだと気づきがあった。

その中でぼくは、引っ越す前の家では深い青のあじさいが、うすい色に変わっているのに気づいた。母に聞くと、「あじさいは環境と土の成分で色が変わるのよ。」と教えてくれた。長い年月が過ぎて、土も栄養がなくなり、そして環境が変わって元気がなくなっている。となると、土は生きて年をとっているんだと、ぼくなり気づきだした。また、花も自分で色を調節して「自然は生命」だと教えてくれていることに気づいた。自然は常に呼吸しているのだ。しかしその呼吸をむしばんでいるのが人間なのだ。

ぼくは、数日前のテレビで、インドネシアの土はかれて積み重なった草が炭化してできていると知ったばかりだ。それは国民の収入を支えるパーム油の生産のために、畑を焼いた火が火災を起こす「泥炭火災」が問題になっているとのことだった。土がいためつけられすぎて呼吸ができず死んでいるのだ。火災を止める事も大変なことだが、この先、ぼくたちの手で土を改良しなければ大地は戻らないだろう。人間が犯した罪のしっぺ返しを自然から受けなくてはならないのは当然と言えば当然だ。人間が生きていくために自然に手をつけるのは、身勝手に申し訳ない。だけど共に生きてゆかなければいけない。ならば、「使ったら元にもどし改良する」ことが一番のルールだとぼくは思う。生命をうばったのなら、生命をつなげるありのままの姿にもどすことが、自然と生きてゆく法則だと自然がうたえているようにぼくは思う。

そしてもう一つぼくは考えた。学校教育で「自然を大切にしてください」と習う。生命の成り立ち、大切さを先生方は教えてくれる。でも、今の人間にとって、自然は生命というよりも、資源なのだ。生きてゆくための道具にすぎない。林間学校や、自然の体験教室を経験し、自然の大切さや豊かさを十分に身を感じたとしても、自然は資源や、道具ではないという考えを頭に入れておかなければすべてがふりだしにもどってしまうだろう。これからの未来の教育に重要視する一点だとぼくは思う。

今後、世界はさらに発展を続けて、自然との共生がむずかしくなってゆくだろう。大規模な自然破壊によって世界樹にグレーや黒、こげた茶色の大地が一つ、また一つと増えるであろう。その度に、一歩立ち止まり自然の声に耳をすまして聞いてみよう。土、木々、水、空、自然に関わるすべてのものがこう教えてくれるはず。「世界中の自然の色は、君たちの手の中にある。鮮やかに描くことを忘れた時、そこには何も無いだろう。だが、鮮やかに描けた時は自然の息づかいが聞こえるはずだ」と。